日本の祭りと踊りを偏愛する画期的フリーペーパー

民俗芸能STREAM

マガジン【季刊】vol.01 2011.06

■特集　布川の花祭り

- 笠寺猩々保存会
- 能生白山神社舞楽
- 品川神社太太神楽

ウェブ・動画・ラジオ・雑誌で日本の民俗芸能や和太鼓の情報を発信するプロジェクト
http://minzokugeinoustream.seesaa.net

民俗芸能 STREAM

“てーほへ、てーほへ”
鬼と溶け合う花の里

【概要】 奥三河に伝わる花祭りは全国に数ある民俗芸能の中でも、特別な印象とともに語られる芸能である。それは、柳田国男に師事した民俗芸能研究者である早川孝太郎がその大著『花祭』（現在は講談社学術文庫で入手可能）によって紹介したということもあるが、それを抜いても非常に様々な要素を含んだ魅力的な芸能であることは確かだ。

奥三河地方、天竜川流域に伝わる花祭りは、伊勢流の湯立神楽、霜月神楽に分類されるが、修験道や浄土思想などの影響もみられる。広く天竜川流域の各地区で伝承されており、現在でも東栄町と豊根村を中心に十数か所で花祭りが行われている。今回は、このなかの東栄町布川の花祭りに行ってきた。早い地区は 11 月に開催するが、布川の花祭りの開催時期は 3 月と遅いのが特徴だ。

花祭りは、花宿となった家で湯を囲み、一晩中、舞い続ける芸能だ。かつては新築の民家で行っていたようだが、今は集会所などで行われることが一般化している。祭りの前には、滝祓い、高根祭り、辻固め、神入りなどの神事を行い、今宵の祭りに全国津々浦々の神々を花宿に迎える準備をしていく。そして舞が始まる。ばちの舞、順の舞、市の舞、地固め…。途中で一力花の舞がはさまって、子どもたちによる花の舞。夕方から始まった祭りは、もう深夜の日付が変わる頃である。そして、鬼の登場。山見鬼、三ツ舞、そして榊鬼。明け方も近い午前三時すぎ、榊鬼の登場を持って祭りは最高潮を迎える。花祭りは「寒い、眠い、煙い」祭りだと言われるのはまさにこの所以だ。翁、四つ舞、湯囃子、茂吉鬼、獅子、そしてしずめの舞。花祭りは、最後に呼んだ神々を返す神事によって終わるのである。

五色の紙で彩られる舞庭

【取材記】「民俗芸能を研究しているなら、花祭りは観ておいたほうがいい」と勧められることが多く、以前から気になっていた。幸いにして民俗芸能学会で知り合ったＫさんに「今度、布川の花祭りに行くけど、いっしょに行く？」と声をかけてもらい、機会を得た。東京から中央道を通り、飯田を経由して奥三河へ。布川は、花祭りの中では３月のはじめという一番遅い時期の開催だということだったが、道中標高が高いところはまだ雪が積もっており、日当たりが悪い下道はまだチェーンが必要なくらいだった。それでも車で４時間もかからずに布川にたどりついた。まわりは民家がほとんどない林にかこまれた山道。こんなところに本当に人が集まってくるのかという場所だったが、車道から少し下ったところに、天王八王神社と布川の集会所があった。二軒の出店も夜のまつりに向けて準備中で、集会所脇の空き地には焚き火の用意がしてあり、人もまばらに集まっている。わくわくしながら神社の階段を下り、木造の古びた集会所に入ると、パッと世界が変わる。五色の紙に彩られた湯蓋に一カ花が天井にところ狭しと飾られ、そのまわりを切り紙が囲む。中心にはかまどがつくられ、大きな釜が据えられている。四方の木の壁には紙のはがし後が何重にもついており、脇のほうに「一金何千円也　何野某」と書かれた半紙が貼られている。奥には太鼓があり、半纏や紋付を羽織った人びとが奥で何やら準備をしている。どうやら、ちょうど滝祓いに行くところらしい。わけもわからずついていく。どうやら紋付を着ている人はこの祭りの司祭者である花太夫のようだ。半纏を着ている人々は祭事の奉仕者であるみょうど。花太夫とみょうど数名がスタスタと、私が今来た道を引き返し、少し歩いた先にある小さな滝まで歩いていく。その後ろを十数名のカメラマンや民俗学系の学生たちがぞろぞろとついていく。私もその一群に混じってついていった。滝祓いでは、湯立に使う水を汲む。さきほどの釜で湯をわかし、そのまわりで舞うのだ。遠くからなのでよくはわからなかったが、供物を備え、儀式を行ってから水を汲んでいたようだ。次いで神社脇の小高い場所で高根祭りを執り行う。御幣を四方および中央に祀り、供物を備え、呪文を唱え、印を結ぶ。花祭りは神事・神楽ではあるが、印を結ぶのはまさしく修験道の影響だ。その後、集会所脇で同様に辻固めを行い、花宿の外で行う神事はひと段落。

集会所に集まる人も徐々に増えてくる。Ｋさんは布川に限らずよく花祭りに足を運んでおり、知合いが多い。また直接の知りあいでなくても、愛知周辺の祭りに通っている人やカメラマンたちの顔を覚えている。ここまでのアクセスの悪さを考えると少し不思議な感じだ。地元の人びとの他に、研究者、祭り好き、そしてカメラマンが集うのが、観光客があまりこないアクセスの悪い地方の祭りの実態といったところだろう。

花祭りは、特に事前に断ることもなく、当日いけば無料で観ることができるわけだが、数千円のご祝儀を渡すと漏れなくお弁当と記念品がついてくる。今回は、カップ酒、稲荷寿司に、花祭りのパンフとハガキ、そして鬼面がプリントされた湯のみがもらえた。さらにの「一金何千円也　何野某」と半紙に書かれ、花宿の壁に貼られる。良い記念にもなるので花祭りを訪れた際はぜひ渡そう。

。

神事は花宿の神座へと移る。願帳や五色の御幣のようなものを神棚へとあげ、うたぐらと呼ばれる文句を口にしながら印を結びつつ、粛々と進められていく。これらの神事はほとんど花太夫の一人舞台。後で花太夫さんに話を伺ったところ、「花祭りは神事に始まり、神事に終わる」とのことで、外の人間はついつい派手な舞に目がいってしまうが、それらはすべて神事あればこそとのことだった。神を迎え入れる神事を行って、にぎやかではなやかな舞が一晩中舞われ、そして神を返す神事で締めくくる、というのが花祭りなのだ。

湯立の釜に火が入り、花太夫が印を結ぶ。煮立ってくると水蒸気で湯蓋が揺れ、神が来たことを告げる。そして花太夫がばちの舞をはじめる。今宵の舞を囃す太鼓のばちをまず清めるのだ。次に、みょうど三人で舞う順の舞がはじまる。この頃になると、花宿に人があつまってきて人垣をつくり、舞人を囃したてる。神座に太鼓、土間の中央に釜、舞人はその間で主に舞い、時に釜のまわりを移動しつつ舞いつづけるわけだが、その舞台が明確に線引きされているわけではない。時に観客が「真面目に踊れ」「鬼はまだか」「そんな舞じゃだめだ」などと野次を飛ばす。花祭りは「悪態祭り」とも呼ばれ、この騒がしい観客とも祭りの盛り上げ役ともとれる「せいと衆」が重要な役割を果たす。一晩中舞い続ける花祭りだが、せいと衆たちはそれを静粛になど聴いていない。野次をとばし、うたぐらを唄い、時には勢い勇んで舞人に混じって舞っている。せいと衆は、地元の人びとや他の地区の花祭りを担う人々であるのに対して、「花狂い」と呼ばれる、花祭りに魅せられ、毎年のように通い続ける常連の観客がいる。さらにその外側に一般の観客やカメラマンたちが舞庭を囲んでいる。夜になると一般の観客がどっと増えた。最近は花祭り全体で世界文化遺産への登録にむかって盛りあげようと、東栄町や愛知県を巻き込んで観光ツアーも企画しており、この日も花祭りのラッピングバス二台が乗り付けていた。またカメラマンも数多くいるのだが、撮影用にフラッシュらライトをガンガン浴びせることもしばしば。地元としては花祭りを盛りあげたいという想いはありつつも、始めてくる一般の観客とどう付き合っていくかも課題となるところである。

夜も更けてきたころに子どもたちによる花の舞が始まる。華やか衣裳をまとった小学校くらいの子どもたちによる舞。かつて花の舞を舞ったかと思われるせいと衆の兄ちゃんが舞人の前にでてきて勢い良く舞っていたのが印象的だった。さて、日付が変わり花祭りも盛り上がってくるといよいよ鬼の登場である。最初は山見鬼。お伴に小鬼たちを連れて出てくる。三ツ舞をはさんで、ついに榊鬼の登場。巨大な面をつけ、背中に榊をさした榊鬼は、花祭りの象徴的な存在であり、なおかつ一番人気の鬼だ。

ー力花を奉納した人のために舞う。女性の舞人も増えてきた。

湯囃子は若者が威勢よく舞い、そして威勢よく湯をかける

せいと衆や花狂いたちが鬼はまだかまだかと今日一番の声をあげて囃したてる。そして、鬼が出てくると鬼たちとともに舞い、笑い、叫ぶ。「てほへ、てほへ」というのが花祭りの囃子文句だが、花祭りを一度観たらもう耳について離れなくなるほどに、せいと衆たちが叫ぶのだ。そしてもう明け方も近いこのころになると私の意識も怪しくなってきて、夢うつつの際で榊鬼に出会ったような気もしてくる。夜が明け、威勢よい四ツ舞が若者四人で舞われ、翁もひょこひょこやってくる。そして、湯ばやし。花祭りのクライマックスだ。湯たぶさを持った若者四人が煮立つ釜の周りをぐるぐる回りながら舞っていき、いっせいに中の湯をまわりにかけだす。慣れたカメラマンは湯ばやしになるとレインコートやカメラカバーを取り出してこの湯の襲撃に備える。もっとも湯にかかるのは縁起がよいことなのでせいと衆や花狂いたちはもう進んで湯にかかりにいくわけだが。

そして、湯ばやしが終わり、びしょぬれになった舞庭に藁が敷かれる。この時におそらく小学校に入る前の 5、6 歳の子が扮するミニマムサイズの鬼が出てきた。小さいながらもステップはしっかりしていて、これはかなり将来有望な小鬼だった。そして朝鬼とも呼ばれる緑の茂吉鬼が出てきて、その持つ槌で湯蓋の中に吊るした蜂の巣と呼ばれる袋を落とす。次いで、獅子が出てきて舞は終わる。その後、花太夫がしずめの面をつけて、印を結びつつ反閇を踏んでなかなか帰らない神たちを追い返していく。この後もげどう祓いやげどうがりなどの神を返す儀式を行って花祭りは終わる。

今回は布川に行ったが、他の地区も面白い。プロ和太鼓グループの「志多ら」が深く関わる東薗目。東京の東久留米市で花祭りを行っている東京花祭りと関係を持ち、自前でも NPO を組織している御園など現代的展開も盛んだ。伝統とともに現在を生きる花祭りをぜひ一度体感してほしい。（西嶋）

【データ】

■名　称：布川の花祭り
■祭礼日：毎年３月の第１土曜～翌日
■場　所：布川集会所
（愛知県北設楽郡東栄町布川）
■問合せ：0536-76-1812
（東栄町村役場経済課）
■Ｈ　Ｐ：東栄町役場　花祭り
http://www.town.toei.aichi.jp/
04_kanko/hanamatsuri.html

“猩々の馬鹿や～い”
受け継がれる猩々の記憶

【概要】 猩々（しょうじょう）を広辞苑で引いてみると「中国で、想像上の怪獣。体は狗や猿の如く、声は小児の如く、毛は長く朱紅色で、面貌人に類し、よく人語を解し、酒を好む。」とある。まさにこの広辞苑のような怪獣「猩々」が、現在でも愛知周辺で暴れまわっている。猩々を模した大人形の中に人が入って、子どもたちを全力で追い回し、竹の棒や団扇で尻を叩いてまわるというちょっと変わった、秋田のなまはげ的な芸能である。

猩々は、江戸後期から幕末にかけて、尾張の鳴海村から周辺地域へと普及していったものが現在に伝えられている。この猩々の歴史に関しては「笠寺猩々保存会」のホームページに詳細な考察がある。

名古屋周辺の各地区で伝えられていた猩々だが、近年では地域の担い手も減少傾向にあった。2005 年に名古屋で愛・地球博が開催され、笠寺の猩々が地元の芸能として出演することになり、それをきっかけとしてできたのが笠寺猩々保存会だ。

中心となったのは久野充浩氏。久野氏は、若い頃から猩々の作り方を研究し、「一閑張り」という古くから伝わる技法を習得。現在でも猩々の製作・修復に取り組んでいる。保存会に集まったメンバーは地域で猩々を被るボランティアをしていた若者たち。現在では、名古屋市南部を中心にいろいろな祭りやイベントで活躍している。

笠寺猩々保存会は名古屋市南区の笠寺が拠点だが、今回は豊田市にある高岡神明宮の例大祭に保存会が出張で活動している様子を取材した。高岡神明宮にも猩々大人形が伝わっており、その修理を久野氏に依頼したことが縁となったとのことだった。

笛と太鼓のお囃子も

【取材記】猩々のことを知ったのは、愛知で神楽のお囃子などを実践・研究している新美優さんを介してだった。新美さんとは花祭りの時にお会いして、その後も Twitter でやりとりしていたところ、猩々の話を教えてもらい、さっそく足を運んでみた。新美さんが所属する笠寺猩々保存会の出張公演で、豊田市の高岡神明宮例大祭で猩々をやるというのだ。名古屋駅につき、赤くてかわいい三河線で若林という駅までいき。そこからえっちらおっちら 30 分ほど歩いたところに神明宮はあった。周りはトヨタ関連の施設と田園風景が広がっている。想像していたよりもかなり立派な神社だった。付近の神社を合祀してできたらしく、この神社にも猩々の大人形が伝わっているのだが、担い手が不足しており、現在は笠寺猩々保存会に実演をお願いしているのだという。新美さんとも再会し、会長の久野充浩さんに挨拶。とても気さくな方で、猩々にそっくりなことにびっくり！そして、笠寺猩々保存会の面々も若い。20 代、30 代の若者たちが集まって祭りを楽しみながら猩々に取り組んでいる。お囃子にも力をいれていて、お祭りの前に、神明宮の奉賛会の方々といっしょに演奏し、意見交換などお囃子の交流を行っていたのも印象的だった。昼過ぎになっていよいよ猩々の出番である。境内から少し離れた場所に子どもたちが集まっており、そこに猩々軍団が乗り込んでいく。キャーキャーと騒ぎながら逃げ惑う子どもたち、全力疾走で追いかける猩々、それをにやにやしながら眺める大人たち。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図である。「あれ、昔私怖かったのよねぇ」と奥様方が話していた。神明宮に古くから関わっている方も昔見た猩々の思い出を子どものように目を輝かせながら語っていた。世代を越えて共有される猩々の記憶を、今に繋げる笠寺猩々保存会。笠寺での本番は 10 月とのこと、ぜひ足を運びたい。（西嶋）

【データ】

■名　称：高岡神明宮例大祭・猩々
■祭礼日：毎年４月第１日曜日
■場　所：高岡神明宮
（愛知県豊田市高岡町３４）
■問合せ：0565-53-3516
（豊田市役所高岡支所）
■Ｈ　Ｐ：笠寺猩々保存会
http://www.geocities.jp/shoujouhozonkai/

東京、品川に
今も伝わる太太神楽

【概要】 東京、品川にも今に伝わる民俗芸能がある。品川神社で行われる太太神楽だ。品川神社は、京急新馬場駅から歩いてすぐ、第一京浜沿いにある。1187 年に源頼朝が創建したと伝えられ、その後も太田道灌、徳川家康、家光らの寄進によって栄えた神社である。明治になると根津神社や神田神社と並ぶ東京十社に数えられた。境内には包丁塚や富士塚なども建立されており、近隣の信仰も多く集めていたことが伺える。

品川神社の太々神楽は戦国時代に始まったといわれ、演目はかつては 20 座、現在では 12 座が、品川神社太太神楽保存会によって演じられている。

舞は素朴でゆったりとした調子で、囃子はゆったりとしていながらも音色が鮮やか。囃子の楽器は、竜笛、大拍子、太太鼓が仕様されている。

神楽の衣裳と面はかつて徳川家から奉納されたものとのことだが、現在の衣裳は新調されたものだそうだ。

神楽が奉納される品川神社の祭りは以下の通り。

元　旦【1 座】　1/1 1:00～
春　祭【6 座】　4/15 後の日曜 14:00~
例大祭【2 座】　6/7 に近い金曜 19:00~
新嘗祭【3 座】　11/23 18:00~

また付近は、東海道の一番目の宿場として栄えた品川宿の史跡も数多い。しながわ観光協会作成のまち歩き地図もあるので、品川歴史散策をしてみてもよいだろう。

▼しながわ観光協会　東海道品川宿
http://www.sinakan.jp/htmb/sina/

スーツ姿の氏子衆

【取材記】 品川神社で神楽をやるらしい、という情報を知ったのは偶然だった。たまたま予定のあいた日曜に近場で観にいける民俗芸能イベントはないかと探していた時、たまたま検索にひっかかったのだ。前情報はネットの小さな告知だけ、当日は身一つで品川へ。最寄り駅は京急の新馬場駅なのだが、ＪＲの品川駅から歩いた。それでも徒歩 15 分ほどだ。品川のビル街を抜け、第一京浜沿いをてくてく歩いていくと、小高い丘の前に鳥居が。そこが品川神社だった。一応、鳥居の脇には「例大祭」の看板が出ているものの、「お祭り」感は特になく人のざわめきやお囃子も聞えてこない。大丈夫か？とおもいつつ階段を上っていくと、境内にはスーツの集団が。まるで法事に集まったような人びとが 2、30 人。神職、職人風の人がちらほら、そしてギャラリーのカメラマンや、学生風の若者、外国人ら数名が遠巻きに祭りの開始を待っている。なるほど、氏子や身内中心の静かな祭りなのだなと納得しつつ、境内を撮影してまわる。境内には様々な祠や碑があり、品川神社がこのあたりの信仰のハブになっていたことがよくわかった。中でも目を引いたのが富士塚だ。富士を信仰し詣でる富士講の人びとが作った築山があるのだ。落語の「富士参り」を思い出し江戸の町人文化に思いを馳せていたところ、春祭が始まったようだ。先ほどのスーツの氏子衆が中に入り、神職の方が奥の扉を開け、太太神楽の奉納がはじまる。

春祭の舞いは 6 座。拝殿の四方を祓い清める四方拝の舞、三光尉の面をつけ籾を蒔く稲荷の舞、矢を持った天狐が勇壮に舞う矢天狐の舞、花童子が桜の花を持って舞う花鎮の舞、青い幣帛と白い幣帛を持った二人の舞人による青白幣帛の舞、そして最後に猿田彦と真似天狗による猿田の舞。

基本的には淡々粛々とで舞う。ただ竜笛、大拍子、太太鼓による囃子の音色は鮮やかで一聴の価値がある。神楽奉納後は、氏子らが奥に参拝し、祭りは終わった。その後、氏子らは社務所で直会があったようだが、私はここで失礼した。東京の山の手近くだからといって変に観光化されず、祭りが行われているのは発見だった。きっとまだまだこういう祭りが数多くあるのだろう。また、氏子の職人さんでオシャレな根付に小物入れを下げ、鼓気味よい身のこなしをしている方がいて、その粋な様に感嘆した。　（西嶋）

【データ】

■名　称：品川神社春祭　太々神楽
■祭礼日：毎年４月１５日以後の日曜
■場　所：品川神社境内
（東京都品川区 3-7-15）
■問合せ：03-3474-5575
（品川神社）
■Ｈ　Ｐ：北品川 Online
http://kitashinagawa.net/

能生
白山神社
舞楽

今も聖性を失わない
民俗芸能化した舞楽

【概要】鄙舞楽という民俗芸能がある。笙（しょう）、篳篥（ひちりき）、龍笛（りゅうてき）などによって奏でられる雅楽、その雅楽にのせて舞われるのが舞楽だ。陵王や納曾利といった舞楽面を一度は眼にしたことがあるのではないだろうか。舞楽は８世紀に中国や朝鮮から伝来した楽舞をその起源としている。平安時代に整理され、現在に伝わる舞楽の原型ができる。宮廷および寺社により伝承されてきたが、中でも大阪の四天王寺において盛んに伝承されていた。この四天王寺に伝承されていた舞楽が各地に広まり、土着化し、民俗芸能にカテゴライズされるようになったのが「鄙舞楽」である。新潟県糸魚川市能生の白山神社に伝わる舞楽は、室町時代の永享年間（1429～1440）に四天王寺の舞楽が伝えられたものと云われている。

舞楽が舞われる白山神社の春季大祭は、地元では現在でも「能生まつり」と呼ばれ親しまれている。そのことが象徴的なように、この舞楽の特徴は、今もなお、多くの地元の人びとによって舞や行事が伝承されていることにある。舞楽を舞う舞い手稚児のほかに、太鼓や笛といったお囃子、獅子舞を舞う若者連中、三基の御輿の担ぎ手たちに、行列や祭礼の奉仕者たち。そして、祭りに集まる観客たち。祭りに関わる人の家族や友人たちが神社内の桟敷席や石段にゴザを広げ、弁当や酒を楽しんでいる。まるで花見のような風情の中で行われるこの祭りは、日本海側の小さな町としては違和感を覚えるほどの盛況ぶりである。大祭の準備や稚児の決定、小泊社人への使い、能生谷の集落への協力依頼、そして後始末など、膨大な労力をかけながら、今もなお、伝承されているのが能生白山神社の舞楽なのだ。

若者連中による獅子舞

【取材記】 民俗芸能のことをいつも教えてもらっているＫさんに、「おもしろい鄙舞楽があるよ」と誘われて観にいったのがこの能生白山神社の舞楽だ。新潟の最西部で富山との県境に位置する能生は、東京からおよそ 350ｋｍ、車で 5 時間近くかかる道のりである。途中、長野で諏訪大社や戸隠神社に寄り道をし、妙高山の脇を抜けたその先が能生だ。この長野から日本海側へ出る山深い道は修験者たちが通った道のりでもある。能生の町は商店街はあるが活気はそれほどなく、日本海側の小さな街といった印象だ。

だが、白山神社の春季大祭は想像以上ににぎやかだった。参道には屋台が並ぶのはもちろんだが、舞楽殿を中心に社務所前や石段には既にスペースが確保されており、地元の人びとが続々と集まり、シートを広げて見物が始まる。多いのは観客だけではない、様々な道具や飾り物を持つ白丁の衣装の氏子たち、紋付や裃を着て段取りを行う世話役たち、獅子舞を踊る若者連中に、楽器を担当する楽人たち、三基の御輿をかつぐ威勢のいい氏子衆に、お手伝いの学生服に下駄をはいた小中学生。祭りの奉仕者だけで 100 人ちかい人びとが動いている。さらには、稚児たちは祭礼日に地面に足をつけることはない。必ず稚児守に肩車され、また稚児傘により守られながら移動を行う。また御輿がお旅所へ入った際に本社から供物を運ぶ役たちは、地面に足をつけないようためだけに設置された足場をつたって備えていく。祭礼日に私たちが目にする神事はごく一部であり、祭礼日以前以後も含めた非常に多くの神事や決まりごとを今もしっかりと行っているのである。だが、それは粛々とだけ行われるわけではない。

能生まつりは、いろいろと観客を「じらす」。祭りの始まりの社人と神使のやりとりは「七つ半」も繰り返し、御輿もまた定位置についてから動き出すまでに何度も焦らし、ひっぱる。さらには稚児や舞人たちの舞いが終わりそうになるともっと舞えと引きとめ囃す。こちらは神事のような「決まりごと」というよりも、場を盛り上げる「お約束」的なコミュニケーションだ。しかし、ひっぱりにひっぱった最後の陵王の舞直後の怒涛のクライマックスには圧倒される。能生白山神社を訪れる際はぜひ最後まで観てほしい。（西嶋）

【データ】

■名　称：能生白山神社春季大祭 舞楽
■祭礼日：毎年４月２４日
■場　所：能生白山神社境内
（新潟県糸魚川市大字能生 7238）
■問合せ：025-552-1511
（糸魚川市教育委員会文化振興課）
■Ｈ　Ｐ：能生白山神社
http://nouhakusan.jp/

いろいろ募集！

■フリーペーパー置き場募集！
民俗芸能 STREAM マガジンを置かせてもらえるところを募集中！

■広告募集！
民俗芸能 STREAM のネット・動画・ラジオ・雑誌に掲載する広告を募集中です。お気軽にお問合せを！

■取材先募集！
あなたの街の芸能を取材させてください。フリーペーパーや動画の作成も行います。記者も募集中！

■生中継しませんか？
USTREAM を用いて祭りやイベントの生中継を行います！

すべてのお問合せは
minzokugeinoustream@gmail.com

民俗芸能カレンダー

ここでは、これから行われる注目の民俗芸能イベントを紹介します！

■6 月 25 日（土）
銀鏡神楽公演@国立劇場
宮崎で 12 月に一晩かけて奉納される神楽を東京で観ることができます

■8 月 4 日～7 日
荒馬踊り@青森県今別町
津軽半島の先っぽの町で今も演じられる芸能。毎年取材に行ってます。

■8 月 20 日（土）
全国こども民俗芸能大会@青年館
伝承者不足が問題化する民俗芸能を受け継ぐ全国の子どもたちの実践！

※民俗芸能 STREAM のウェブサイトでは Google カレンダーを使ってより詳しい最新の民俗芸能イベント情報を掲載しております。ぜひ、一度ご覧ください。

日本の祭りと踊りを偏愛する画期的フリーペーパー
民俗芸能 STREAM マガジン 【季刊】vol.01 2011/06
http://minzokugeinoustream.seesaa.net
minzokugeinoustream@gmail.com
電子書籍版・メールマガジン・動画・ラジオも配信中！

企画・編集・発行
西嶋一泰（民俗芸能 STREAM 代表 @souryukutsu 東京都三鷹市）
https://sites.google.com/site/souryukutsu